

怖かった B29

四宮 達雄さん（昭和 10 年生まれ）

私は今 88 歳（令和 5 年時点）です。1935 年（昭和 10 年）2 月、千葉市で生まれました。

戦争の思い出は「空襲」の怖さです。

子どもの頃、「米軍爆撃機 B29」が飛んで来るのを見ると、とても怖かったことが、昨日のように思い出されます。

1940 年（昭和 15 年）、私が、5 歳の時、奉公人を 2、3 人使って洋品店「テーラー四宮」を営んでいた父が亡くなり、母の実家である八日市場へ移り住みました。母は、私と 3 歳の妹を親に預けて、東京へ働きに出ました。帰って来るのは、月に 1 回くらいでした。「中島飛行機」という所で、飛行機の部品づくりをしていました。「中島飛行機」というのは、今の「スバル (SUBARU)」の前身です。当時は東洋最大、世界有数の航空機メーカーで「零戦 (ゼロ戦)」など多くの軍用機を開発製造していました。たくさんの女の人が働いていたということです。

翌年、1941 年（昭和 16 年）12 月、私が 6 歳の時、日本がマレー半島とハワイ真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争が始まりました。

八日市場は、B29 の通路となりました。銚子沖から東京へ、そして、東京から銚子沖へと B29 は編隊を組んで、頭の上を何度も何度も通過して行きました。下から見上げる B29 は大きく黒く、たくさんの編隊を組んで飛んでいく有様は、怖い光景でした。

「東京が空襲で危ない。」「孫（私や妹）が親無し子になってはいけない。」と、祖母は母親を東京から呼び戻しました。

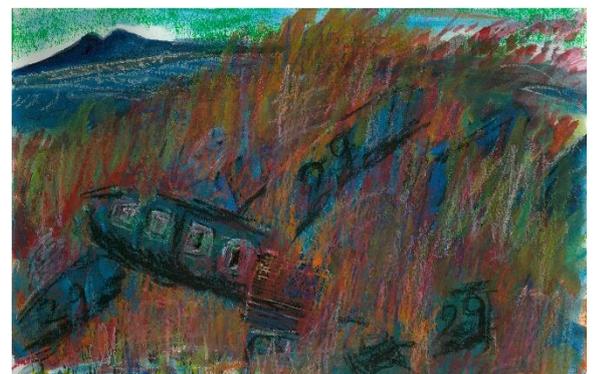
やがて、八日市場も危ないということで、1945 年（昭和 20 年）に現在も住んでいる豊住に、親子 3 人で移り住みました。B29 は、ここでも上空を行き来していました。

豊住の家には、大きな檜の木がありました。その檜の木に隠れて B29 を見ていました。B29 は行き来だけでなく、機銃掃射による攻撃をします。辺り一面、田んぼのような所を歩いていたりすると、その人を目がけて、ダダダダダッと攻撃してきます。危ないと思ったら、すぐにその場に「伏せ！」と大人から言われていました。立っていると目立ってしまうからです。だから、B29 を見かけると、すぐに伏せました。それでも見つかり、亡くなった人もいました。「B29 は、おっかない！」とても怖かったです。

1945 年（昭和 20 年）4 月 13 日のことでした。現在の栄町の矢口（やこう）という所に、B29 が落ちました。1 ヶ月前には、東京大空襲があり、たくさんの人が亡くなりました。私は 10 歳でした。その日は東京の板橋方面が空襲にあったということなので、その帰りの B29 の一機かもしれません。夜、火だるまになって、豊住方面に飛んで来ました。

「危ない！」誰もが、自分の家の方に落ちて来ると恐怖に感じるほど、すごいスピードでその火だるまは迫ってきました。結局、その火だるまは、矢口の水田に落ちました。

「B29 が落ちたぞ。」と聞いたので、「みんなで見に行こう。」と私は友達を誘って見に行きました。家から歩いて 30 分ほどの所でした。飛行機の残骸が横たわっていて、煙が出



四宮さんが描いた墜落した B29

ていました。パイロットは亡くなっていたということでした。

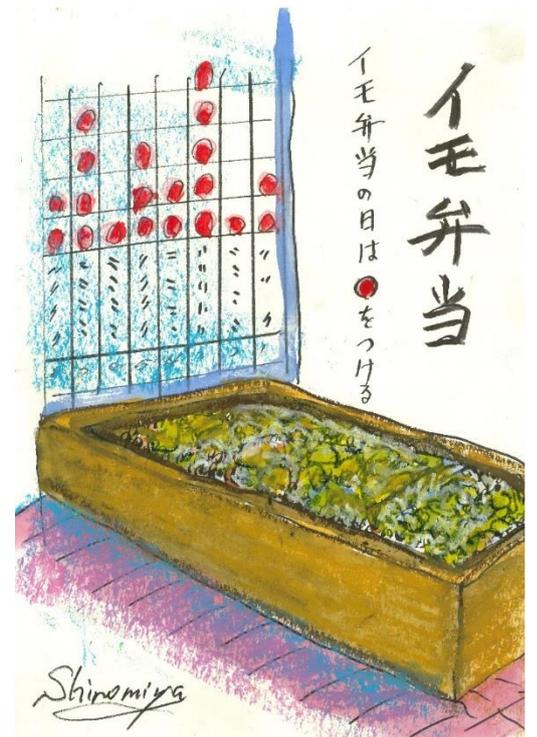
私の妻から聞いたことも、最後に付け加えたいと思います。それは、終戦後の食糧難の時の学校でのお弁当の思い出についてです。

妻は、終戦の翌年に小学校に入学しました。3年生の時の話です。

学校へは、毎日お弁当を持って行きました。みんなはいろいろな弁当を持って行きました。教室の後ろには、「お芋弁当」などを持って行くと、ご褒美に○がつくグラフが貼ってありました。先生は、「恥ずかしくないんだよ。」と言って、恥ずかしさを感じさせないように励ましてくれ、そのグラフに○をひとつ付けてくれました。妻は、その○が欲しくて、お芋弁当を作ってもらって持って行ったということです。芋がたくさん入っていてご飯は少ししか入っていないお弁当です。その時の先生の優しさとお弁当のことは、忘れられないと話します。

今の平和な世の中では、想像もできないと思います。二度とこのような辛い思いは、したくないし、させたくないです。みんなで、平和や戦争についてもっと考えて欲しいです。

(原文のまま掲載しています)



四宮さんが描いたお芋弁当とグラフの絵